

山川健次郎と歴史編纂事業..

『京都守護職始末』と『会津戊辰戦史』『幻の附録』を中心に

A Compilation of the History of Aizu at the End of the Edo Period by Yamakawa Kenjiro

小宮 京

HITOSHI KOMIYA

はじめに

本稿は、山川健次郎が関与した歴史編纂事業について考察する。最初に、明治維新をどう論じるかという「明治維新観」に関して¹は、大久保利謙による研究をはじめ、田中彰の研究が挙げられる。²『復古記』や『維新史』などの明治政府による歴史編纂事業に関

しては、宮地正人、³松沢裕作⁴らによる研究が存在する。それから島津家や毛利家といった大名家による歴史編纂作業に関する考察も存在する。⁵これらの研究は、いずれも明治維新の「勝者」の側を

1 大久保利謙『大久保利謙歴史著作集七 日本近代史学の成立』（吉川弘文館、一九八八年）。

2 田中彰『明治維新観の研究』（北海道大学図書刊行会、一九八七年）。

3 宮地正人「『復古記』原史料の基礎的研究」『東京大学史料編纂所研究紀要』一号（一九九一年）、宮地正人「政治と歴史学―明治期の維新史研究を手掛かりとして―」同『天皇制と歴史学―史学史的な分析から―』（本の泉社、二〇一九年）所収など。

4 松沢裕作『明治政府の同時代史編纂』箱石大編『戊辰戦争の史料学』（勉誠出版、二〇一三年）所収、松沢裕作『修史局における正史編纂構想の形成過程』松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』（山川出版社、二〇一五年）所収、松沢裕作『戊辰戦争の歴史叙述』奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点 上』（吉川弘文館、二〇一八年）所収、松沢裕作『明治政府の正史編纂と史料収集』佐藤孝之・三村昌司編『近世・近現代文書の保存・管理の歴史』（勉誠出版、二〇一九年）所収。

5 広田暢久「毛利家編纂事業史 其の一」『山口県文書館研究紀要』三号

分析するものである。かつて三谷博が「維新政治史の研究で使われている史料は、したがって未だに偏ったまま」「王政復古時の敗者、そしてアウトサイダーは、史料の利用状況だけから言っても、無視され続けている」と指摘したことがある。⁶その状況は平成三〇（二〇一八）年の「明治維新一五〇周年」を経た今日でも変わりはない。なお、平成三〇年には、東北を中心に「戊辰一五〇周年」という展示が行われた。⁷このように歴史認識をめぐり、今なお対立が存在している。「敗者」の側の歴史認識については、例えば、旧幕臣に関する考察が進んでいる。⁸また、会津の歴史認識に関しては田中悟の研究が挙げられる。会津側からの視点が深まらなかった

たことについては家近良樹の指摘が重要である。¹⁰

本稿が目指するのは山川健次郎である。¹¹先行研究は、健次郎が会津の歴史認識の確立に果たした役割を叙述するものの、関係した著作の具体的な編纂過程については考察していない。近年、健次郎に関する基礎的史料が充実しつつある。¹²そこで、健次郎の未刊行の「遺稿」を用いながら、¹³健次郎の兄の山川浩名義で刊行された『京都守護職始末』や健次郎監修として刊行された『会津戊辰戦史』との関わりを考察する。それにより限られたものではあるが編

10 家近良樹『江戸幕府崩壊 孝明天皇と「一会桑」』（講談社学術文庫、二〇一四年）二二―三二頁。

（一九七四年）、同「毛利家編纂事業史 其の二」「山口県文書館研究紀要」六号（一九七九年）、同「毛利家編纂事業史 其の三」「山口県文書館研究紀要」七号（一九八〇年）、同「毛利家編纂事業史 其の四」「山口県文書館研究紀要」八号（一九八一年）。また、寺尾美保の一連の研究、寺野美保「明治一〇年代の島津家の家政運営と財政事情」「尚古集成館紀要」八号（一九九六年）、同「明治期島津家における家史編纂事業」松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィ』（山川出版社、二〇一五年）所収、同「島津家の歴史編纂と幕末薩摩藩の対外意識」井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』（勉誠出版、二〇一六年）所収なども参照。

6 三谷博「明治維新の史学史」『ヨーロッパ研究』九（二〇一〇年）一八四頁。
7 東北の歴史認識に関しては、友田昌宏「地域の／地域からの「明治一五〇年」」『歴史評論』二〇一九年九月号、を参照。
8 樋口雄彦『敗者の日本史一七 箱館戦争と榎本武揚』（吉川弘文館、二〇一二年）二二―二四〇頁。
9 田中悟『会津という神話…（二つの戦後）をめぐる（死者の政治学）』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）。

11 山川健次郎に関する伝記的研究は少ない。最新の研究として、中澤俊輔「近代日本の非主流派とナショナリズム―山川健次郎に見る科学・忠君・愛国の留学に関する一考察 黒田清隆とその北海道開拓構想に注目して」『青山史学』第三七号（二〇一九年）がある。また、WEBRONZAに寄稿した、小宮京「会津の歴史認識と山川健次郎」『WEBRONZA』二〇一八年九月三日掲載 <https://webronza.asahi.com/politics/articles/2018092600009.html>（二〇一八年一〇月一日閲覧）で本稿の議論の一部を紹介した。

12 尚友倶楽部・小宮京・中澤俊輔編『山川健次郎日記 印刷原稿 第一―第三、第十五』（芙蓉書房出版、二〇一四年）、小宮京・中澤俊輔「山川健次郎手帳日記（明治四〇―四二年） 翻刻と解題」『青山史学』第三四号（二〇一六年）、小宮京・中澤俊輔「史料の窓 森戸事件と山川健次郎東京帝大総長」『法律時報』二〇一五年一〇月号（通巻一〇九一）など。

13 山川健次郎の遺稿に関しては、小宮京「史料散歩 山川健次郎のもう一つの「遺稿」」『日本歴史』（通巻八一七号）二〇一六年六月号、小宮京・中澤俊輔「山川健次郎「遺稿」の基礎的考察」『青山史学』第三五号（二〇一七年）、を参照。

纂過程を考察する。とりわけ後者に収録する予定でありながら健次郎が死去したことで収録を見送ったと考えられる「幻の附録」にも触れながら、考察したい。

山川健次郎と歴史編纂事業に関する考察を通じて、今なお継承されている「敗者」の側の歴史認識がどのように形成されたか、その一端を明らかにしたい。

一 旧会津藩における歴史編纂事業

山川健次郎と歴史編纂事業との関わりを論じる前に、旧会津藩における歴史編纂事業について簡単に触れたい。

現在の見解では、樋口が論じるように、史談会で旧幕臣が本格的に語るようになったのは明治三九（一九〇六）年に史談会主催で殉国志士弔慰会が開かれて以降だという。また、雑誌『旧幕府』が刊行されたのは明治三〇年に入ってからである。¹⁴最近では、伊藤哲也が『維新階梯雑誌』（宮内公文書館所蔵）について「会津松平家が明治二十年（一八八七）年頃から編集した京都守護職時代の記録」、「明治二〇年代に編集された史料と考える」と論じている。¹⁵

14 樋口『箱館戦争と榎本武揚』二二五—二三〇頁。殉国志士弔慰会には健次郎も出席した（二二五頁）。

15 伊藤哲也「孝明天皇直筆の手紙・御宸翰」『会津人群像』三四号（二〇一七年）三一頁。

本稿が注目するのは、新政府側の歴史編纂事業との相互作用である。

松沢裕作が論じる『復古記』編纂事業は興味深い。¹⁶新政府側が「正史」を編纂する過程と理解すると、新政府側の歴史認識が形成される過程として読むことができる。とはいえ、一方的な史料に基づく歴史編纂事業を遂行したわけではない。重要なのは「復古記」編纂の為に、¹⁷各藩に史料を提出させたことである。いわば政府の側が「賊軍」の側に歴史を整理することを求め、引いては「賊軍」側の歴史認識を問う機会を与えたようなものと評価できよう。

旧会津藩で政府の依頼に対応したのは南摩綱紀らだと推定される。その理由として、当時の学識者として漢学者が挙がることが多い。『復古記』やその他、政府側の歴史編纂にかかわった川田剛（甕江）や重野安繹は漢学者であった。彼ら漢学者が修史事業に従事したように、明治初年代の旧会津藩も南摩ら漢学者が編纂事業を進めたのではないか。

南摩が提供した記録「南摩綱紀筆記」は『復古記』に活用されている。¹⁸また、南摩らの作業の結実の一つが「若松記」と考えられ

16 松沢「明治政府の同時代史編纂」。

17 復古記に使用された原史料について、宮地「『復古記』原史料の基礎的研究」を参照。

18 小林修「南摩羽峰と幕末維新期の文人論考」（八木書店、二〇一七年）三八頁。注二七を参照。

る。小林修による「平石弁藏『会津戊辰戦争』の参考書類の中に『若松記』南摩綱紀所蔵」とある¹⁹との指摘は興味深い。平石著の初版刊行年は大正六（一九一七）年である。この時点では、南摩が所蔵していたことが分かる。現在、会津図書館が所蔵する「若松記」には「此書南摩綱紀ヨリ借用シテ写置 明治九年三月十九日」とある。「若松記」の中身も、記載年月日として「復古外記・越後口所引 若松記 自七月下旬至九月中旬」「若松記 白河口戦記・復古外記所引 八月下旬ノ分」と記されている。²⁰まさしく「復古外記」編纂の為に提供された史料であることが分かる。同時に、明治九年の時点で、南摩の「若松記」編纂作業が終わっていたことも分かる。

なお、『復古記』は昭和四（一九二九）年から昭和六（一九三一）年にかけて刊行された。奇しくも『会津戊辰戦史』は昭和八（一九三三）年に刊行された。偶然だろうが、結果的に『復古記』に対抗する形で刊行されたことになる。

まとめると、新政府側の歴史編纂事業が進むのと併行して、戊辰戦争で戦った旧会津藩側にも歴史をまとめる作業が求められた。そ

うして集められた、あるいは作成された史料群が、山川健次郎らの歴史編纂事業へと流れ込んだのではないか。一例に過ぎないが、「若松記」が『会津戊辰戦史』の多くの箇所で見引用されている。他にも、京都守護職時代の京都の藩邸に残っていた文書を、南摩が京都府勤務時代に入手し、松平子爵家に献上したという。その史料が『京都守護職始末』執筆の史料となったことが知られている。²¹残念ながら、南摩の史料はごく限られており、現時点では南摩と旧会津藩の歴史編纂事業との関わりは不明な部分が多い。

先に触れた、南摩が収集した会津藩の史料は『日本史籍協会叢書』に収録されている。『会津藩庁記録』が刊行されたのは、大正七（一九一八）年以降のことである。『会津藩庁記録 第一』の緒言に曰く「旧会津藩主子爵松平保男氏が此ノ史料ノ謄写ヲ許サレ且ツ印刷配本ノ事ヲ諾セラレタル厚意ヲ敬謝ス」とある。²²三谷博によれば、日本史籍協会の出版に際しては「明確な編集方針なしに始められたと伝えられる」という。²³また、『日本史籍協会叢書』に「会津藩士浅羽氏日記」が収録される予定だったが実現しなかった。²⁴

21 花見朔巳編『男爵山川先生伝』（故男爵山川先生記念会、一九三九年。以下『山川伝』と略記）四四九頁。

22 日本史籍協会編『会津藩庁記録 第二』（日本史籍協会、一九一八年）。

23 三谷博「日本史籍協会」「国史大辞典」一一卷（吉川弘文館、一九九〇年）所収、一七五頁。

24 高田祐介「日本史籍協会叢書」稿本の伝存と構成「明治維新史学会編『明治維新と史料学』（吉川弘文館、二〇一〇年）所収、一五六頁。

19 小林「南摩羽峰と幕末維新期の文人論考」三九頁、注四二。平石弁藏『会津戊辰戦争』（兵林館、一九一七年）二四五頁に記載されている。

20 「若松記」は川口芳昭編『会津藩幕末・維新史料集』（おもはん社、二〇〇五年）に全体の翻刻が収録されている。引用した記載は、解説「若松記」『会津藩幕末・維新史料集』所収、四五七頁を参照。

おそらく浅羽忠之助の文書であろう。²⁵

ともあれ、旧会津藩側の歴史編纂事業が明治初年代から行われており、「若松記」のように一定の結果に結びついたことは間違いない。しかしながら編纂事業の中心と考えられる南摩が自ら歴史書を記すことはなかった。小林によれば、南摩が記した「歴史教科書の先駆」とされる『内国史略』（羽峯書屋、明治五年）は当初、孝明天皇の時代までを扱う予定だったが、変更された。また続編にあたる石村貞一編『内国史略後編』（桐陰書屋、明治七年）には積極的に関わる意思を見せなかったという。²⁶

北原雅長の『守護職小史』などを例に挙げ、「原稿執筆時から刊行までの「空白」にこそ、佐幕派維新史の無言の屈折した表象が刻み込まれている」という田中彰の指摘はその通りであろう。²⁷それを踏まえつつ、世に出ることのなかった事業に触れた。

二 山川健次郎と会津の歴史認識に関して

山川健次郎は会津の歴史認識の形成に大きな役割を果たした。健次郎が関わったのは、山川浩『京都守護職始末』（沼沢七郎、明治

- 25 浅羽忠之助とその史料に関しては、阿部綾子「浅羽忠之助の生涯とその遺録 浅羽家寄贈史料から」『福島県立博物館紀要』二八号（二〇一四年）を参照。
26 小林「南摩羽峰と幕末維新期の文人論考」一五〇—一五四頁。
27 田中「明治維新観の研究」一七八頁、注三四を参照。

四四（一九一一年）と、山川健次郎監修、会津戊辰戦史編纂会編『会津戊辰戦史 全』（会津戊辰戦史編纂会、昭和八年）である。

最初に、会津の歴史認識を確認したい。

薩長中心の歴史認識と異なり、会津は「朝敵」ではないとする。それゆえ戊辰戦争は新政府軍と「朝敵」会津など奥羽越列藩同盟との戦いではなく、新政府と会津とは等しく勤王であると再定義される。その象徴が、「東軍」（＝会津など）と「西軍」（＝新政府軍）という表現であろう。会津が「朝敵」ではないことの論拠は文久三（一八六三）年十月九日に下された孝明天皇の御宸翰に求められる。²⁸この御宸翰は孝明天皇が会津を深く信頼していたことを示し、会津も勤王であったこと、会津の義を証明するものとされる。

この御宸翰は明治二九（一八九六）年七月一日の史談会の席上で最初に紹介された。紹介者は南摩綱紀で、その談話は翌年に『史談会記録』六一輯（明治三〇（一八九七）年一月）として刊行された。²⁹この時期、維新ブームが発生しており、旧幕臣たちによる、旧幕府側からの維新が語られはじめていたとされる。この時点では、会津から見た歴史は、未だ広く知られてはいなかった。

戊辰戦争の被害は甚大で、会津から見た歴史を描くことには困難が伴った。そうした中で、御宸翰が広く世に知られたのは『京都守

- 28 近年、言及される御宸翰について整理した研究が刊行された。伊藤「孝明天皇直筆の手紙・御宸翰」を参照。
29 小林「南摩羽峰と幕末維新期の文人論考」一二—二三頁。

『護職始末』の刊行によってであった。³⁰興味深いのは、明治四四年刊行の『京都守護職始末』の著者は健次郎の兄である山川浩とされていることである。浩は明治三一（一八九八）年に死去していた。

その後「先生（『健次郎』）一人で右の文書類は勿論、其他の参考書類を一々読破取捨して漸く脱稿完成した」とする。³¹現存する『京都守護職始末』の草稿の文字は全て健次郎の筆跡だという。むしろ「浩がどの程度この本の内容に関与したのかは、今となってはわからない」とされる。³²

『京都守護職始末』が浩名義で刊行された理由として、出版した際の影響を憚ったというのが通説である。一例を挙げると、健次郎の甥にあたる櫻井懋³³は著書『山川浩』（私家版、昭和四二（一九六七年））で次のように記した。「この書は浩の遺稿となっていて、実質的には健次郎の執筆するところである。しかるに何故著者を浩にしたかという、一つには亡兄の志を継いだのと、他面に

は本書を世に出すとその影響するところが憂慮されるものがあつたので、故人の名において世に問うことになったのだと聞いておる」。³⁴その内容ゆえに、世間の反響、とりわけ薩長出身者の反発を怖れたとする。健次郎の心配は杞憂ではなかった。『京都守護職始末』刊行前に、会津出身の北原雅長の著作『守護職小史』が明治三二（一八九八—九九）年、『七年史』上・下巻が明治三七（一九〇四）年に刊行されていた。³⁵これらのなかで孝明天皇の御宸翰に触れたことが影響したのか、『七年史』刊行時に、北原が不敬罪の罪名で一時拘留されたと伝わる。³⁶

健次郎が『七年史』上巻に寄せた序に曰く、

「唯佐幕勤王と排幕勤王との差違あるのみ。我邦維新史の多くは排幕勤王家の手に成れるを以て事の真相を得ざるもの少なからず。亡家兄去二堂先生之を慨し、京都守護職始末の著あり。故ありて未だ之を世に公にせず」（適宜句読点を付した）

30 例えば、戦前に刊行された、高梨光司『読書雑記』（高梨光司、一九三一年）

は、『京都守護職始末』を高く評価する。北原雅長の両著作を「維新史中에서도出色」と評価しつつも「前記守護職始末と併せ読まば、読者を益すること大」と、あくまでも『京都守護職始末』の添え物扱いである（一四四頁）。高梨は元新聞記者である。

31 『山川伝』四四九頁。

32 襲田健「山川浩」小松山六郎・間島勲編『幕末・会津藩士銘々伝（下）』（新人物往来社、二〇〇四年）所収、二四九頁。

33 櫻井懋に関しては、小宮「史料散歩 山川健次郎のもう一つの「遺稿」」を参照。

34 櫻井懋『山川浩』（私家版、一九六七年）七七頁、「遺稿「京都守護職始末」出版の経緯」。

35 刊行年は、国会図書館のデータによった。『守護職小史』の「序」によれば、北原が謹慎を命じられている最中に、記録を残すべく筆を執り、明治三年正月時点で完成していたという（『幕末維新史料叢書四』（人物往来社、一九六八年）一二七頁）。

36 早川喜代次「会津藩賊名一掃に先輩の苦心 北原雅長・山川健次郎・平石弁蔵」同「皎月亭の懷想」（白虎隊記念館、一九九六年）所収、五八頁。北原の孫の談話による。

文中の「去二堂先生」とは山川浩を指す。健次郎は会津を「佐幕勤王」として位置付け、世間に「排幕勤王」の歴史が溢れていることを嘆く。同時に『京都守護職始末』を公表していないことにも触れている。ちなみに、明治三四（一九〇一）年に健次郎は東京帝大総長に就任したばかりであった。未だ官途にあったことを考慮すれば、やはり健次郎の名前で『京都守護職始末』を刊行するのは現実的ではなかったと思われる。

そのうえで『京都守護職始末』をしばらく非公開とした経緯も確認したい。

その間の事情は花見朔巳編『男爵山川先生伝』にまとまっている。会津松平家の財政的窮状の救済と長州出身の三浦梧楼との交渉が関係し、具体的には、健次郎が三浦から御宸翰の公表見合わせを依頼されたという。³⁷ たしかに、三浦は自伝『観樹將軍回顧録』で、会津松平家の苦境を訴える健次郎の話聞き、自らの目で御宸翰を確認したとする。同じく長州出身の山県有朋らを説くも成功しなかった。田中光顕宮内大臣との会談の際に述べた言葉は、薩長出身者が御宸翰を脅威に感じる様子がよく表れている。³⁸

37 『山川伝』四三三―四三六、四四九―四五〇頁。

38 三浦梧楼『観樹將軍回顧録』（中公文庫、一九八八年。原本は一九二五年刊）三二―三三頁。

「先帝の御宸翰が大分ある。これを拝読して見ると、はつきりとは分らぬが、とにかく会津が最後に至るまで一糸乱れずに奮闘したことはどうもこの御宸翰が本になっておるように思われる。もし今日こういう御宸翰が表面に出ると、変なことになりはせぬか。忌憚なく申せば、先帝の御在世が続いたならば、ご維新は出来なかった。これは明らかな事実だ。強いて言えば、陛下の御孝道如何ということになりはせぬかと思う。これを会津が出さぬということは幸いだ、もし出したら如何にするか」

三浦の説得と事の重大さを踏まえ、明治天皇から松平家に五万円を下賜することで決着したという。こうして『京都守護職始末』はお蔵入りとなった。³⁹ だが明治三十七年に『七年史』が刊行され、そして、三浦の依頼から一〇年余り経った明治四四年に『京都守護職始末』が刊行された。⁴⁰

ところで『明治天皇紀』によれば、下賜金は「三万五千元」だったという。⁴¹ 出典の一つは「徳大寺実則日記」だが、日記では言及されていない。もう一つの出典は「御逸事」である。これは藤波言

39 三浦『観樹將軍回顧録』三〇九―三一四頁。

40 『山川伝』四五〇頁。

41 宮内庁編『明治天皇紀 第十』（吉川弘文館、一九七四年）二九三―二九四頁。

忠が関与したものである。⁴² 第一九冊に「明治天皇、会津松平氏を救い給う」との項目があり、おそらくはこれがその出典であろう。⁴³

以上をまとめると、政府の反発を考慮しつつ、かつ三浦が尽力した松平家への下賜金の件もあり、亡くなった山川浩を著者とする体裁で出版せざるを得なかったというのが、通説である。

さて、明治四四年一月に「山川浩遺稿」と称した『京都守護職始末』が出版された。ここである疑問が浮かぶ。そもそも公表を見合わせたはずの『京都守護職始末』がなぜ「明治四四年一月」に「山川浩遺稿」として刊行されたのか。

ここで新資料を用いながら、その理由を再検討したい。従来の通説では、説明にやや疑問が残るところがある。結論を先取りすれば、これに関しては、藩閥関係者や政府の動きを踏まえれば説明可能と考える。

前述したように北原が『七年史』を刊行し、宮内省も『孝明天皇紀』を明治三九（一九〇六）年に刊行していた。「作られたもの少数であり、配布も限定されていて、一般に公開されたものでなかったが、会津側の主張の核心が宮内省によって承認された形となったので、健次郎もいよいよ出版を決意したのであったろう」と、

遠山茂樹は指摘する。⁴⁴

さらに明治四四年五月に政府は文部省に維新史料編纂会を設置した。この維新史料編纂会に関しては、かつての史談会と比べ薩長土肥の元老が総登場しており「彼等元老をして、その健在中に薩長中心の維新史を確定しておかなければならないという焦慮感をいだかした」という大久保による評価がある。⁴⁵ 当時も、いわば薩長ら藩閥による公定の維新史を刊行する準備を始めたと理解されたのではないか。

健次郎は維新史料編纂会に対抗するための策を練った。そして会津の歴史認識を世に広めるための方策として浩名義の『京都守護職始末』を刊行したのではないか。

関係資料を確認すると、『山川伝』所収の、明治四四年四月六日付飯沼閔彌宛書簡に曰く「今回文部省に置かるべき維新史料編纂会は守護職始末が動機となりし旨の由に候ひしが、余り突飛なる事に付、深くも心に止め候はで聞候ひき。然るに昨日池田晃淵氏の話を承るに、其説真なるが如し。甚だ面白く感じ申候。三浦悟樓が大隈（重信）に話したる説にて、山縣（有朋）などが、始末（京都守護職始末）によれば、先帝の御時代には、長州は凡て違勅の行動を為

42 「御逸事」に関しては、岩壁義光「宮内公文書館所蔵『御逸事』について もう一つの『明治天皇紀』『神園』（二八）、二〇一七年が詳しい。

43 岩壁「宮内公文書館所蔵『御逸事』について」所収の目録による（三九頁）。

44 遠山茂樹「解説」山川浩著、遠山茂樹校注、金子光晴訳『京都守護職始末 一』（平凡社、一九六五年）所収、二四四―二四五頁。

45 大久保利謙「王政復古史観と旧藩史観・藩閥史観」同『日本近代史学の成立』所収、三六六頁。

し来れるものにて、後世に至り大いに誤解さる、恐あれば、先長元老生前に後世の誤解を防ぐに足るべき様なし置かざる可からずと、今回の事に相成候由、大隈より池田に語りたる由に御座候」と。『山川伝』の執筆者は「文部省の維新史料編纂会も実はこの書の刊行が動機となったものではあるまいかと、一部には見られてゐる」と、やや弱い表現を用いた。⁴⁶ 書簡中に登場する池田晃淵は、帝国大学文科大学の史料編纂係に務めた人物で、健次郎が『京都守護職始末』の下原稿を執筆依頼した人物である。⁴⁷ ちなみに、遠山茂樹は『京都守護職始末』刊行のみが維新史料編纂会の立ち上げに影響したと考えることが妥当か否かについて、「にわかに断定を下しにくい、当時一般、とくに佐幕ないし反政府側からそう見られていたことは事実であった」と評価した。⁴⁸

それから、健次郎の関係文書を収録した『書簡集』は、⁴⁹ 明治四四年四月二一日付、妻りう宛書簡を収録しており、その内容はさ

46 『山川伝』四五〇―四五二頁。

47 『山川伝』四四八頁。池田に関しては、新藤透「松前藩出身の歴史学者池田晃淵書誌 経歴と事跡」『図書館情報メディア研究』一（二）、二〇〇三年も参照。

48 遠山「解説」二四六頁。

49 『書簡集』に関しては、小宮京・中澤俊輔「山川健次郎『書簡集』に関する基礎的考察」『青山史学』三八号（二〇二〇年）を参照。他に、簡単な紹介として、小宮京「山川健次郎と日米親善／『書簡集』が示す真実」『論座』二〇一九年八月二五日掲載（<https://webbronza.asahi.com/politics/articles/2019082000011.html>）を参照。

らに興味深い。曰く「今度文部省に於て維新史料編纂局^{マツ}を置きたるは京都守護職始末を見て長閑の元老共が狼狽して始めたる結果なりと大隈より池田が聞きたる由につき別紙の如き手紙に御座候。それにつけても人の信用は大事なるものに御座候。守護職始末に在り候事の大体は外の書にも候が亡兄様御著述と云ふので元老輩も氣にいたし候ものと見え申候」とする（傍線は引用者による。適宜読点を付した）。

まず「守護職始末に在り候事の大体は外の書にも候」と述べている通り、北原『七年史』などで、孝明天皇の御宸翰はすでに紹介されていた。それにもかかわらず『京都守護職始末』が山川浩の遺稿とされたからこそ、「長閑の元老共」「元老輩」に強い衝撃を与えたという認識が看取される。当時存命の長州出身の元老は山県有朋と井上馨であった。

山川浩は戊辰戦争で会津の軍勢を率いて戦い、西南戦争でも活躍した。貴族院では藩閥政府を批判する将軍として知られていた。それを踏まえれば、幕末に白虎隊の一隊士（のち除隊）でしかなかった健次郎の名前で出版するよりは、浩の名前で刊行した方が世間に對して強い印象を与えるはずである。戊辰戦争で対峙した「長閑の元老共」が無視できる人物ではなかった。その意味で、浩名義での刊行は健次郎の期待通りの成果を生んだと評せよう。

また、妻りう宛書簡には「別紙池田の手紙お目に掛け候」と書いており、池田から手紙が来ていたようである。

ともあれ、維新史料編纂会が立ち上がると、旧会津藩からも顧問を出した。当初は柴太一郎が任じられたが大正一二（一九二三）年に死去した。松平子爵家で協議ののち、大正一三（一九二四）年一月三〇日付で健次郎に辞令が下った。もともと閑職だったために、一回しか出席しなかった。健次郎は維新史料編纂会との関係を『会津戊辰戦史』執筆時に疑問点の解消などで活用したという。⁵¹ 維新史料編纂会の外郭団体として設立された日本史籍協会の叢書に、⁵² 会津藩関係の史料が収録されたのは、維新史料編纂会に柴太一郎や健次郎が関わったことによるのだろう。

まとめると、『京都守護職始末』が出版されたのは明治四四年一月だった。これは半年前に維新史料編纂会が設置されたことを受け、健次郎が世間への公表に踏み切ったのではない。藩閥の側から維新史を構築しようとする元老らに、会津の側から健次郎が異議を申し立てたと理解すべきであろう。

ところで、『京都守護職始末』刊行が、健次郎の人生に意外な影響を及ぼした可能性がある。健次郎は明治四四年四月から九州帝国大学初代総長として着任していた。一月に明治天皇のお召列車の

50 維新史料編纂会については、箱石大「維新史料編纂会の成立過程」『栃木史学』第一五号（二〇〇一年）を参照。他に、小沢栄一ほか「座談会」維新史研究の歩み（第一回）——維新史料編纂会の果たした役割『日本歴史』第二四六号（一九六八年）も参照。

51 『山川伝』四〇七—四〇九頁。

52 三谷「日本史籍協会」一七四頁。

脱線事件が発生し、責任を感じた門司駅構内主任の清水正次郎が自殺する事件が発生した。健次郎は二月二日に地元紙『福岡日日新聞』に清水を批判する談話を寄稿した。これが現地の新聞界や政界を巻き込み、中央政界にも波及した。政府としては、大正元（一九一二）年八月に前年の一九一一年八月から検討していた東京帝大総長への転任で決着をつけようとした。ところが転任は妨害にあって失敗した。小股憲明は妨害したのは元老の山県有朋枢密院議長と芳川顕正枢密院副議長だったと推測する。さらに「政友会と官僚閥との政争の一環」と位置付けた。⁵³ だが小股の指摘には理解しかねる部分がある。その後、健次郎は第三次桂内閣で東京帝大総長に転任した。政争の一環であれば、桂内閣で人事異動が実現するのは変である。後年のことだが、健次郎は寺内正毅首相に入閣を請われたことがある。⁵⁴ 寺内内閣で入閣した閣僚や健次郎の経歴を踏まえれば、敢えて言えば健次郎は官僚閥に括られるであろう。その点からも、小股の指摘する構図には疑問が残る。

むしろ、『京都守護職始末』刊行が「長閥の元老共」の怒りを買ったために、人事で意趣返しを受けたと考える方が妥当ではないか。

例えば、健次郎の交渉相手であった長州出身の三浦の反応につい

53 小股憲明「門司駅員の引責自殺と山川健次郎言責事件——二つの忠君愛国をめぐって——」『人文學報』七二号（一九九三年）五八—五九頁。

54 小宮京・中澤俊輔「解題 日記から見える山川健次郎」尚友俱樂部・小宮・中澤編『山川健次郎日記』所収、二二九—二三〇頁。

て、健次郎の伝記は「些か不満の態であった」と穏やかであったかのように記したが、⁵⁵ 実際は不満を爆発させていた。なんと自伝で交渉の一切合切を暴露した。「爾来会津では固く徳義を守って、どこから何といつて来ても、この御宸翰は決して出さぬ。これだけはどうぞ出してくれるなど言つてあるから、ちゃんと守っている」としたのは、⁵⁶ 精一杯の嫌味であろうか。付け加えると、三浦の自伝刊行時に『京都守護職始末』は刊行されていた。

このように『京都守護職始末』刊行が長州出身者の神経を逆撫でしたことは間違いない。それが健次郎の転任に思わぬ結果をもたらしたという推測も述べた。その後の経過は『山川伝』によると「反感」が「さる方面に在つても殆んど冷却」したために転任が実現したという。⁵⁷ 『山川伝』執筆者も、政争のような構造的なものではなく、山県の一瞬の怒りを買つたという解釈に立っているのは明らかである。

本節で論じたことをまとめる。『京都守護職始末』刊行前後の時系列を整理すると、健次郎が、文部省に設置された維新史料編纂会を強く意識していたことが分かる。政府が藩閥側から見た維新史を刊行する前に、健次郎が会津から見た歴史を提示しようと試みたのではない。要するに、健次郎は藩閥政府による維新史構築に対抗

するため行動したのであろう。そのために幕末に活躍した兄の浩名義で刊行したと考えられる。健次郎が書簡に記したように『京都守護職始末』刊行は藩閥関係者への打撃を企図していたことは間違いない。見事にその意図は達成されたが、健次郎の九大からの転任に際して山県有朋らの意趣返しを招いたと考えられる。

三 『京都守護職始末』関連資料について

健次郎の「遺稿」には、『京都守護職始末』に関連する原稿が残っている。

まず、「遺稿 七」原稿に収録されている原稿類の表題を以下に示す。

- | | |
|----|-----------------------|
| 八七 | 徳川氏の東北に於ける諸侯の配置 |
| 八八 | 維新当時における水戸藩の国情 |
| 八九 | 松平容保公守護職の奉命と関東下向辞退の事情 |
| 九〇 | 萩事変五十年追悼会に於ける講話 |
| 九一 | 維新の際に於ける年来の疑問 |
| 九二 | 会津藩禄制一斑 |
| 九三 | 会津松平家の知行高 |
| 九四 | 校訂戊辰殉難名簿凡例（旧稿） |
| 九五 | 会津藩主要人物略伝（未定稿） |

55 『山川伝』四五〇頁。

56 三浦『観樹將軍回顧録』三一七頁。

57 『山川伝』二二五頁。

- 九六 山本覺馬の伝記に就て
- 九七 田中土佐
- 九八 野村左兵衛
- 九九 飯田兵左衛門
- 一〇〇 西郷刑部
- 一〇一 遠山寅次郎

原稿の末尾には出典が記されていることもあるが、上記八七から一〇一までは、一切記されていない。内容から講演原稿と推定可能なものもある。一方、何のために執筆されたのか、明確ではない原稿も存在した。「遺稿」全体を通して受けた印象として、かつて「遺稿」原稿六後半から七は会津関係である」と指摘した。⁵⁸本節ではより踏み込んだ考察を行う。

ここで取り上げるのは「九五 会津藩主要人物略伝（未定稿）」である。

最初に、この原稿の作成日時を推定したい。
亡くなった人物に注目すると、もつとも遅い「諏訪頼徳」が「明治卅一年会津に於て病死す」と記されている（傍線は引用者による）。ただ、他の調査によると、諏訪の没年は明治三二

（二八九九）年である。⁵⁹諏訪の実際の没年を踏まえると、この原稿は明治三二年五月以降の作成と推定される。一方、「秋月胤永」が「今猶生存す」とあるため、明治三三（一九〇〇）年以前の作成である。他に、西郷頼母も「今なお存命」とされている。西郷は明治三六（一九〇三）年に死去した。これらの情報を踏まえると、明治三二年から明治三三年の間に作成されたと推定可能である。

ところで、山川浩は明治三一年二月四日に亡くなっている。⁶⁰諏訪が明治三二年五月に亡くなったことを考慮すると、この原稿の作成者は健次郎以外に有り得ない。これは平凡社版『京都守護職始末』の解説で遠山茂樹が「実質的には山川健次郎の著書と見るべき」と指摘した通り、⁶¹同書に健次郎が深く関与したことを示す史料と評価できよう。

次に注目すべきは「梶原景雄」が明治三二（一八八九）年に北海道で亡くなったことが明示されている点である。これも大変貴重な情報である。梶原平馬は、健次郎の姉の二葉と結婚していた。維新後に景雄と名乗ったという。だが、梶原がいつ亡くなったのか近年まで不明だった。昭和六三（一九八八）年に内藤本家で、平馬の法名が記されていた紙片が見つかったことから、根室の墓が発見され

58 小宮・中澤「山川健次郎「遺稿」の基礎的考察」一一頁。

59 野口信一編『会津人物文獻目録』（歴史春秋社、一九八〇年）一八二頁。明治三二年五月没。

60 櫻井「山川浩」八八頁。

61 遠山「解説」二三九頁。

た。⁶²その梶原の没年が記されていたことは、二葉と離縁したといえ、⁶³明治三二―三三年時点で健次郎の手元には情報が届いていたことを示す。なお、二葉に関する基本史料である黒川竜編『山川二葉先生』（桜蔭会、明治四三（一九一〇）年）にはその履歴が記されている。だが梶原平馬との離縁の時期について触れられていない。この履歴は健次郎が提供した史料に基づいている（写真一・二）。健次郎は敢えて触れなかったのかもしれない。

また、明治三六年時点で、平馬とテイの息子の文雄が、山川二葉や梶原景清と暮らしていた事が分かっている。⁶⁴相続の関係があるため当然かもしれないが、健次郎のもとにはそれ以前から平馬死去の報が届いていたことが確認できた。

一つの可能性として「九五 会津藩主要人物略伝（未定稿）」は、「京都守護職始末」に附録として収録すること考えていたのかもしれない。

だが、山川家と梶原との関係もあり、公表を控えたのではないか。この推測を裏付ける事実として、健次郎の「遺稿」を収録した櫻井懋編『補遺（未定稿） 山川健次郎博士遺稿』（私家版、昭和四四

62 「梶原平馬景雄」菅野恒雄『会津藩に仕えた内藤一族』（菅野恒雄、一九九二年）所収、二〇八―二一〇頁。

63 梶原平馬と二葉がいつ離縁したか、現在でも正確なことは分かっていない。

64 川上淳・本田克代「私立根室女子小学校校長「水野貞」事跡」『根室市博物館開設準備室紀要』七号（一九九三年）五七頁。

（一九六九）年）は、「遺稿 六・七」原稿を中心に収録している。その目次は以下のとおりである。

一 会津藩禄制一斑	九二
一 会津藩士精神教育の概畧―（二部分）	八六「遺稿」六 ⁶⁶
一 松平容保公守護職の奉命と 関東下向辞退の事情	八九
一 維新の際に於ける年来の疑問	九一
一 田中土佐	九七
一 小笠原先生	八四「遺稿」六
一 永岡久茂先生	八三「遺稿」六
一 野村左兵衛	九八
一 飯田兵左衛門	九九
一 西郷刑部	一〇〇
一 遠山寅次郎	一〇一
一 山本覚馬の伝記に就て	九六

九五の原稿は収録されていない。

あくまでも推測に過ぎないが、第一に、浩名義で刊行したことを

65 会津若松市立会津図書館所蔵。

66 「遺稿」六に収録された「会津藩士人精神教育の概略」と、表題が若干違う。

引つ繰り返すような史料を世に出したくなかったこと、第二に、梶原平馬に関する記述を含むため、公表を見送ったのではない。

四 梶原平馬の足跡について

梶原平馬に関して、共同研究者の中澤俊輔氏と調査を行った。先行研究では、梶原平馬の足跡は明治八年四月に会津にいたのを最後に途絶えたとされてきた。同時に、明治十一年に梶原と結婚した水野貞が、明治十四年一月に根室に転任したことが分かっている。⁶⁷

北海道立文書館で調査したところ、「明治一二・一〇・七」時点の書類「福島県平民梶原景雄米商会所設立願出ニ付身元取調方ノ件」という書類を発見した。⁶⁸ この書類には「函館支庁在勤 開拓

大書記官時任為基」とあり、この時点で梶原が函館入りしていたと推測される。ちなみに、明治十二年頃に、函館で米取引所の申請が行われていたと『函館市史』にある。曰く「当地における取引所設立の動きは、かなり早い時期から起きており、具体的には明治十二年の弘前町士族七名による米商会所設立の動き（開拓使函館支庁に設立出願）」という。実際に取引所が設立されたのは明治二十七年であった。⁶⁹

話を戻すと、この書類には、梶原は「福島県士族 会津郡若松一ノ町七番地」と記されている。『旧斗南士族名簿便覧』に記載された住所は「明治八年四月 若松県下大町一ノ丁 〇上市川村 梶原成馬事景雄」である。⁷⁰

注意すべきは、書類の件名では「平民」だが、史料には「士族」と記されている。また、住所に記された「会津郡」は明治十二年一〇月時点では存在しない。明治十二年一月に「北会津郡」と「南会津郡」が成立していた。これは会津の地名変更を把握しておらず、梶原が既に函館に移住していたことを示唆するのではない。

なお、明治十四年末時点の書類には「函館区相生町十四番地 開

67 水野貞（梶原貞）に関しては、川上・本田「私立根室女子小学校校長「水野貞」事跡」、本田克代「私立根室女子小学校校長「水野貞（梶原貞子）」先生に関する史料追加」「根室市博物館開設準備室だより」一〇号（一九九四年）所収、菅野恒雄「内藤家で見つかった梶原貞子 六十三歳の写真」「根室市博物館開設準備室だより」一〇号（一九九四年）所収、菅野恒雄「東京で生まれ育ち教鞭を執った梶原平馬二度目の妻貞子の足跡」「根室市博物館開設準備室紀要」一〇号（一九九六年）所収、を参照。それらの研究を踏まえた、遠藤由紀子「会津藩家老梶原平馬をめぐる女性 山川二葉・水野貞と「仕事」 昭和女子大学女性文化研究所編『昭和女子大学女性文化研究叢書 第七集 女性と仕事』御茶の水書房、二〇一〇年）所収、が最新の研究である。

68 「福島県平民梶原景雄米商会所設立願出ニ付身元取調方ノ件」「官省府県往文移録 共四貞 明治十二年自十月第九百廿六号至十二月第千六百六十七号」（簿書三三二二）所収。

69 「函館市史デジタル版」 http://archives.cfun.ac.jp/hakodateshishi/tsunsetsu_02/shishi_04-06/shishi_04-06-05-02-01.htm（二〇一九年八月六日閲覧）。元は「函館市史」通説編第二巻、八一―八三頁。

70 好川之範「梶原平馬」小松山六郎・間島勲編『幕末・会津藩士銘々伝（上）』（新人物往来社、二〇〇四年）所収、一四五頁。

拓使士族 梶原景雄」と函館在住の旨が明記されている。⁷¹ 清健社の事業としては、糞尿を収集し、硝石を製造する事業を目的としていた。梶原の他に、小澤寛吉（東京府京橋区）、中宮誠之（石川県金沢区）、⁷² 佐久間源二（函館区）の名前が挙がっている。

梶原が明治一四年頃に函館在住であったことは、一緒に行動したと思われる梶原テイ（水野貞）に関する公文書から確定事項として扱われてきた。ここからは川上淳・本田克代論文と菅野恒雄論文に引用されていない文書を取り上げたい。

「梶原テイ」（書類上の記載に従う）は「明治一四年二月一九日付」の「御受書」で「女紅場文学教員」の辞令を受けたことが分かる。⁷³ それ以前に関しては「師範学校附属小学予備教員梶原テイ女紅場へ在勤替方ノ件」との書類が存在し「師範学校附属小学予備教員 月俸金七円 梶原テイ」と本文に書いてある。書類の日付は「明治一四・一二・一八」である。⁷⁴ その後、十一月（日付の記載はな

い）に「今般家事向都合有之恐縮之至リニハ候得共何卒教員御免被成下度」との書類が残っている。⁷⁵ 許可の日付は一月一九日なので、それ以前に提出されたと考えられよう。⁷⁶ それから「元女紅場文学教師梶原テイ根室支庁へ採用ノ処向フ一週間残務取纏為致方ノ件」との書類が「一二月二二日」付で残っている。⁷⁷ ちなみに、同書類の中では「梶原貞」との記述もあり、「梶原テイ」あるいは「梶原貞」という名前を用いていたことが分かる。

以上が、中澤俊輔氏と調査した、北海道立文書館所蔵の公文書による梶原景雄と貞の足跡である。

公文書の調査を踏まえて、いつ頃梶原が北海道に渡ったのか、貞の足跡と重ね合わせて時期を絞りたい。

前述した通り、明治八年四月時点では、平馬の会津の住所が知られている。一方、貞は明治一年に東京の小学校を退職している。テイについて述べた「北海道立志編 第三巻」所収の「梶原貞子」によれば「明治十一年良縁あり青森県士族梶原景雄氏に配し（中

71 「相生町居住士族梶原景雄外三名清健社開設願ノ件」『取裁録 明治十四年』（簿書四九四五）所収。会社名も書類では「清健社」である。

72 中宮は、加賀藩の洋学者・鹿田正明の弟子であった。中宮は『広益英倭字典』の刊行に関与したとされる。板垣英治「壮猶館翻訳方芝木昌之進と「ハルレー」地球万国暦史」について『日本海域研究』四五号（二〇一四年）七八頁。

73 「女紅場文学教員拝命ニ付辞令拝戴ノ件」『願伺届録 明治十四年ヨリ十五年三月函館県エ引継迄ノ分属之』（簿書四七六七）所収。

74 「師範学校附属小学予備教員梶原テイ女紅場へ在勤替方ノ件」『取裁録 明治十四年ヨリ同十五年三月函館県引継迄ノ分属之』（簿書四七六六）所収。

75 「梶原テイ、今般家事向都合有之ニ付差免出願ノ件」『願伺届録 明治十四年ヨリ十五年三月函館県エ引継迄ノ分属之』（簿書四七六七）所収。

76 「女紅場文学教員梶原テイ依願職務差免方ノ件」『取裁録 明治十四年ヨリ同十五年三月函館県引継迄ノ分属之』（簿書四七六六）所収。

77 「元女紅場文学教師梶原テイ根室支庁へ採用ノ処向フ一週間残務取纏為致方ノ件」『本支庁・往來文移録 明治「十」四年ヨリ同十五年三月中「函」館県引継迄ノ分属之』（簿書五三二九）所収。

略) 明治十四年夫景雄氏に従ひ函館に赴き」とある。⁷⁸その前に關して、菅野恒雄は、明治一年に平馬とテイの長男が誕生していることから、テイの実家である東京の水野家に梶原が潜んでいたと推測する。⁷⁹前述した明治一二年時点で梶原が北海道に在住していた可能性を踏まえるならば、明治一年から一二年の間に渡航したと考えられるのではないか。

次に、なぜ梶原は北海道に向かったのかという疑問が湧く。これまで十分な説明がなされたことはない。ここでは推測を述べる。梶原と二葉の子孫にあたる方にうかがったところ、梶原平馬が北海道に行ったのは「妹がいたから」と伝わっているそうである。⁸⁰

当初、根室在住の櫻井ミワ(山川二葉の妹)の事かと考えた。だが、櫻井ミワと夫の政衛が根室に移住したのは明治一九年六月五日のことである。⁸¹そのため時系列が合わない。この推測のように、従来、梶原の足跡は山川家との関係で理解されることが多かった。

別の家との関係を踏まえて考察すると、ご遺族の言及した「妹」とは、おそらくは函館にいたであろう、雑賀重村の妻の浅子のこと

を指すのではないか。

浅子の上の姉に当たるツヤは平馬の兄・内藤介右衛門に嫁いでいた。⁸³つまり平馬から見れば、浅子は「義姉の妹」に当たる。雑賀重村は明治一二年に茅場郡長を命じられた。⁸⁴また、好川之範によれば、明治一三年には雑賀の義父に当たる梁瀬三左衛門一家が重村邸で暮らし、その他の一族も函館に移ってきたという。⁸⁵好川は雑賀を「明治初年代の北海道在住会津人士の中では、一番出世」したと評している。⁸⁶つまり梶原は雑賀(ひいては梁瀬家)の伝手を辿り、函館に渡ったのではないか。

なお、雑賀重村は「明治一〇年一月二六日に根室支庁へ転じ、翌一一年一月二六日には函館へ転任し」た。雑賀の住居は上大工町で、梶原の住居の相生町の隣であった。⁸⁷先に論じたように雑賀を頼って梶原平馬が北海道入りしたとすれば、梶原一家は明治一

地」(北海道新聞社、一九九二年)が詳しい。

83 川上・本田「私立根室女子小学校校長「水野貞」事跡」四七一―四八頁。

84 「函館市／函館市地域史料アーカイブ」<https://trc-adeac.ttc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/0120205100/0120205100100020/h011770/> (二〇一九年八月二二日閲覧)。元は「函館市史」通説編第二巻、三七二頁。

85 好川「幕末の密使」二〇五―二〇六頁。

86 好川之範「雑賀孫九郎」同『北の会津士魂』(歴史春秋出版社、二〇一八年)所収、八七頁。

87 川上・本田「私立根室女子小学校校長「水野貞」事跡」四七、四九頁。雑賀の履歴の出典は「北海道立文書館 簿書一九七〇『明治一〇年一月 使員進退録』履歴書。同三六七―「庁員履歴短編」明治一二年改造」である。

78 本田「私立根室女子小学校校長「水野貞」(梶原貞子)」先生に関する史料追加」九頁より再引用。

79 菅野「東京で生まれ育ち教鞭を執った梶原平馬二度目の妻貞子の足跡」六五頁。

80 杉浦勢之先生のご教示による。

81 櫻井懋「櫻井家の記録」(昭和四三年)一三頁。

82 雑賀重村に関しては、好川之範「幕末の密使 会津藩士雑賀孫六郎と蝦夷

年末から明治一二年初頭に函館入りしたと推測されるのではないか。その後、雑賀重村は明治一三年九月一〇日に亡くなった。⁸⁸頼りにしていた雑賀が亡くなったことで、梶原一家は函館を離れる決心をしたのかもしれない。

梶原平馬に関する調査は以上のとおりである。未だその足跡は不明な点ばかりだが、今後の調査の手掛かりとして記した。

五 『会津戊辰戦史』の編纂と「幻の附録」について

死去した兄の浩名義で『京都守護職始末』を刊行した実績を買われたのか、健次郎は会津側から見た戊辰戦争の記録にも関与した。健次郎が晩年まで取り組んだ『会津戊辰戦史』の監修である。

監修する経緯を簡単に述べると、最初に古河末東が原稿を完成させた。大正一一（一九二二）年に、会津出身の有力者からなる会津会の幹事と評議員がその原稿の訂正増補を行うことを決定し、健次郎に監修を依頼した。健次郎は編集体制を整え、自身も「各種の参考資料を渉猟して校閲に遺漏なきを期」した。この作業は昭和三（一九二八）年末に一段落した。⁸⁹健次郎は昭和六（一九三一）年に亡くなり、二年後の昭和八年に『会津戊辰戦史』が刊行された。以

上が、『会津戊辰戦史』の編纂作業に関して、記録に残っている事実である。

『会津戊辰戦史』を紐解けば、随所に典拠が示されている。前述した「若松記」（会津若松市立会津図書館所蔵）のように所在が明確で閲覧可能な史料がある一方で、所在すら明らかではない史料もある。時には「編者記憶」という典拠すら存在する。⁹⁰一体どんな史料に依拠したのか知れたかったが、編纂史料の所在は良く分からなかった。

近年、『会津戊辰戦史』の編纂時に使用されたと思しき史料を、健次郎のご遺族のもとなどで発見した。そこには『会津戊辰戦史』校訂時の健次郎の考え方が伝わる内容も含まれている。⁹¹

ここで取り上げるのは、前に触れた「遺稿 七」原稿収録の原稿類、とりわけ九七以降である。表題を再掲する。

- 九七 田中土佐
- 九八 野村左兵衛
- 九九 飯田兵左衛門
- 一〇〇 西郷刑部
- 一〇一 遠山寅次郎

88 河野常吉編『北海道史人名字彙 上』（北海道出版企画センター、一九七九年）三四三頁。

89 『山川伝』四五一一三頁。

90 例えば、『会津戊辰戦史』七三六頁。

91 詳細は、小宮・中澤「山川健次郎「遺稿」の基礎的考察」を参照。

このうち「田中土佐」に関しては「補修者云ふ。右は旧友関場忠武氏の書きたる『会津藩相田中玄清君事実』に拠り、少しく改削したるものなるにより責任は全く補修者に在り」との記述がある。⁹²

健次郎が参考にしたと思われる『会津藩相田中玄清君事実』は、会津図書館に寄贈されていた。⁹³

それから「九八 野村左兵衛」の冒頭に「左兵衛氏は守護職時代、筆頭公用人にて重きを為せし人なるが故に、志士傳中に其の小傳なかる可からざるなり。然るに、本編外島機兵衛傳の後に附言せる如く、其の事績傳はらず」とある⁹⁴（傍線強調は引用者による）。

引用中の「志士傳」とは、廣澤安宅『幕末会津志士傳 一名孤忠録』（廣澤安宅、大正二二年）のことであろう。廣澤安宅は、廣澤安任の甥にあたる人物である。⁹⁵ 同書の「外島機兵衛」の項目の最後に「附記」として「野村左兵衛は我藩の高士且つ先輩公用人にして（中略）左兵衛は機兵衛の最も親しく且つ最も國事を謀りたる所

92 「遺稿 七」原稿より引用。

93 中澤俊輔氏の調査による。同史料は、相田泰三著、会津士魂会編集『会津士魂』（会津士魂会、一九八二年）に収録されている。他に、関場忠武編、赤埴清校『旧会津藩大老田中玄宰事蹟』（出版社不明、明治四二年）という書籍も存在する。

94 「遺稿 七」原稿より引用。

95 高橋喜市編『偉人廣澤安任』（高橋喜市、一九四三年）。会津若松市立会津図書館所蔵。同書は附録として、安任や安宅、安任の嗣子朝平らの系図を付している。

の人なり而して其行事傳はらず甚た惜むべき也」と述べられている。⁹⁶ 書き込みと『幕末会津志士傳』の記述が一致している。

その後、会津で「山川健次郎の筆跡を確認可能な史料」を調査したところ、白虎隊記念館の早川広行氏に会津若松市立会津図書館所蔵の廣澤安宅『幕末会津志士傳 一名孤忠録』（廣澤安宅、大正二二年）をご教示頂いた。⁹⁷ 会津図書館で調査すると同書は複数冊が所蔵されていた。そのうちの一冊に、本文に推敲の跡が残る同書が存在する。これがその書である（写真三）。

最初に注目すべきは、表紙に書かれている「会津戊辰戦史附録号」という文字である。

ページをめくると、冒頭には次の言葉が記されている（写真四）。

「幕末会津志士傳補修者の序

會津戊辰戦史の補修を依頼されたがを受け、業の進むに従つて會津の志士の小傳を附属するの必要を感じたずる深し。然るに亡友廣澤安宅氏にが既ニ志士傳の著があたり。依て■嗣子廣澤朝平君の許可を得て改削増補し、之を戦史の附録せしめむと、したとせり。

補修者」（取消線は原文ママ、追記部分は引用者が太字

96 廣澤『幕末会津志士傳』七四—七五頁。

97 ご教示頂いた早川広行氏に記して感謝する。

にした)

ここには「補修者」としか書かれておらず、だれが補修者なのかは明示されていない。だが、文章には『会津戊辰戦史』の「補修」云々とあり、これを記した人物が健次郎であることが確定する。こうして、会津図書館に残る、廣澤安宅『幕末会津志士傳 一名孤忠録』が、健次郎により推敲がなされた書だと確定した。

以上を踏まえると、俄然興味をそそるのが「目次」の頁である(写真五)。

目次に加えられた推敲の跡から、健次郎が「目次(案)」を作り直していたことが分かる。具体的には、目次のページの右下に記された固有名詞である。右から順番に、野村左兵衛⁹⁸、西郷刑部⁹⁹、小原宇右衛門、遠山寅次郎¹⁰⁰、柳田勝太郎¹⁰¹、眞龍寺¹⁰²、木村熊之進¹⁰³と書かれている。いったん名前を書いた後に朱筆で消している。ここで名前が挙がった人物について調べると現在ですら情報が乏しいこと

が分かる。とりわけ小原に関しては、まとまった情報が存在しない。こうした事実を踏まえるならば、健次郎が執筆を試みたのは後世に記録を残しなかったからと推察される。

このうち、「野村左兵衛」「西郷刑部」「遠山寅次郎」の三名は、「遺稿 七」原稿に収録されていることは既に述べた。これは、健次郎が『幕末会津志士傳』の記述を踏まえ、「附録」化するために新項目を執筆していたことを示すのだろう。興味深いのは、人物に交じって「眞龍寺」が立項されている点である。眞龍寺は、幕末に健次郎が預けられた場所である。

現時点では「遺稿 七」原稿までしか実際に確認していないため、「遺稿 七」原稿に収録されていない「小原宇右衛門」「柳田勝太郎」「眞龍寺」「木村熊之進」の原稿が、未見の「遺稿 八」原稿に収録されていた可能性は否定できない¹⁰³。ちなみに、柳田皎によれば「昨年十月中山川博士より築田戦跡史を読み云々勝太郎が古屋佐久左衛門軍に参加したる動機あらば知らせよとの書面に接し」という¹⁰⁴。健次郎が関係者に手紙を出して確認していたことが分かる。

これは項目執筆を検討していたことの裏付けであろう。残念ながら、これらの原稿は存在していない可能性の方が高いかもしれない。それは、これだけ修正を加えていたにもかかわらず、

98 家臣人名事典編纂委員会編『三百藩家臣人名事典 第二巻』(新人物往来社、一九八八年)に情報あり。

99 宮本五三郎「西郷刑部の勇悍機智」『会津会報』二七号(一九二五年)所収。弦木悌次郎「若松墓参の記」『会津会報』二五号(一九二四年)所収。弦木は遠山を「叔父」と呼んでいる。

101 柳田皎「柳田勝太郎の事」『会津会報』二六号(一九二五年)所収。皎は勝太郎を「亡兄」と呼んでいる。

102 小島一男『会津人物事典 文人編』(歴史春秋出版、一九九〇年)九二頁。

103 「遺稿 八」原稿が存在する可能性に関しては、小宮・中澤「山川健次郎『遺稿』の基礎的考察」一〇—一一頁。

104 柳田「柳田勝太郎の事」五一頁。

健次郎の手による『幕末会津志士傳』が、『会津戊辰戦史』の附録に収録されなかった事実からの推測である。

先ほど引用した「野村左兵衛」には、次のような文言が記載されている。¹⁰⁵

「左兵衛氏と最も親しかりしは柴太一郎氏なりき。依つて太一郎氏の令弟五三郎氏に於て何か記憶なきかと柴五郎氏を煩はし、五三郎氏の令息に尋ね貰ひたるに五郎氏よりの返事を得たり。

山川健次郎先生

柴 五郎

一月二十三日（昭和五年）」

野村左兵衛と親しかった柴太一郎の係累に、太一郎の弟である柴五郎を煩わせて問い合わせたところ「昭和五年一月二三日付」で返信をもらったとする。つまり、昭和五（一九三〇）年時点で、健次郎が原稿を執筆していたことが分かる。健次郎は昭和六年に亡くなった。そのことを考慮すると、会津図書館所蔵の『幕末会津志士傳』目次に記載された新項目の原稿は完成しないまま、亡くなった可能性が高い。原稿が完成していなかったからこそ『幕末会津志士傳』に健次郎が修正を加えた附録が、『会津戊辰戦史』に収録されなかったと考える方が、健次郎の手になる「幻の附録」が完成して

いた可能性よりも、より妥当ではなからうか。

以上の推測が正しいとするならば、従来、健次郎の伝記に依拠して昭和三年末に一段落したと考えられていた『会津戊辰戦史』は、¹⁰⁶未だ健次郎が「幻の附録」を執筆中であったことになる。もちろん本文の校閲は済んでいたと理解すれば矛盾はしない。このような状況にあったからこそ、健次郎死去後もなお時間が必要であり、『会津戊辰戦史』が刊行されるまでに時間差が発生したのではなからうか。

六 幻の附録『幕末会津志士傳』における健次郎の推敲箇所について

前節では、会津若松市立会津図書館所蔵の廣澤安宅『幕末会津志士傳 一名孤忠録』（廣澤安宅、大正一二年）が「幻の附録」となった経緯を論じた。

本節では、同書に残る健次郎の推敲の跡について論じたい。

紙幅の関係上、全体を検討するには至らぬため、健次郎が力を入れたと考えられる部分を抽出し、考察したい。

まず、冒頭の松平容保公の項には、朱筆でかなり追記されている（写真六）。

105 「遺稿 七」原稿より引用。

106 「山川伝」四五三頁。

「◎過激の堂上等何とぞして幕府を責むるの口実を得んとして考慮せしが、何人の思ひ附にや。二十万石以上の大名をして兵を率ゐて京都に滞在し之を守護せしむることを幕府に命ず。徳川幕府の末造に於て二十万石以上の大名は二十一家のミ。而して幕府に於て信頼し得るは尾州、紀州、越前、會津の四藩に過ぎず。他の十七藩の一をして大兵を擁して輦轂の下に在らしめば危険甚しく、幕府の忍ぶ能はざるところなり。上の四藩の内、尾紀は三家の常として已に都合あしきことは受けざるを例とし、幕府も亦之を強ひざるを例とせしかば、尾紀の受けざるは始めより明白なりき。慶永朝臣（春岳）総裁職たりしかば江戸を離る可からず。故に會津をして之に当らしむる外道なきなり。女し守護職を置くことを辞しなば、違勅の処分如遇ふ可く、女し人なきを以て辞すれば京都にて人選あるべき命ある可く、爰に於て會津をして承諾せしむるは此の困難を切り抜くる唯一の策なりき。過激派の人々は此等の事状に明かなりしかば、斯くして幕府を苦めしなり。且つ彼等は會津が二百里の外二兵を出す可からざるを察し我が事なれりと思ひしなり。」

「◎元來、京都守護職の任は世々彦根藩之に当るは幕府の旧制なりしも、削封のため二十万以上の條件に適合せず。且つ桜田変後世評よろ「し」からざる二より、彦根をして当らしむる能はざりしなり。」

「◎当時の制度に於ては関白に殿下の称号が許され居れり。又皇族にても席次は現職大臣の下なりき。」

この項は他にも加筆修正がなされているが、冒頭部分のみ引用した。適宜句読点を付した。

次に「横山主税」の書き込みを確認したい。四〇―四三頁にはほとんど書き込みはないが、四四頁の最後に、まとまって書かれている（写真七）。

「主税子なし。山川兵衛重英の第四子源八郎常道を養子とせり。源八郎早世す。遺腹の男子あり。是を源太郎常盛と云ふ。後二主税と称す。世是を後の主税と云つて常徳と区別す。戊辰の年、常盛若年寄に任ぜられ白川口の副総督たり。五月一日の戦二戦死す。」

とある。山川家との関係を加えたことが分かる。

それから「山川浩」の書き込みも面白い（五四―五五頁）。

「山川大蔵、幼名與七郎、後浩と改む。幼名を常盤と云ひ、後大蔵與七郎と称し、後浩と改む。諱は重栄屠竜子、又去二堂と號す。」

元の文章と、削除と追加部分を反映した。太字は健次郎による修正である。名前の変遷に「常盤」を加え、「去二堂」という号も付け加えたことが分かる（写真八）。

以上から、旧主である松平容保は別格として、山川家の係累に関して、情報が増えていることが、一つの特徴と指摘できる。

朱筆の入れ方にも特徴がある。本文に「◎」を書いて、欄外に「◎」と記す方法である。この書き方は、別の健次郎の原稿でも確認できる。参考に、二葉の履歴の推敲跡を参照頂きたい（写真一・二）。こうした推敲のやり方からも補修者は健次郎だと推定される。

終わりに

本稿は、山川健次郎と歴史編纂事業について論じた。

まず、旧会津藩の歴史編纂事業が、『復古記』のような新政府による歴史編纂事業に対応する形で南摩綱紀らを中心に進展したと推定されること、その史料が山川健次郎らの歴史編纂に継承されたであろうことを論じた。次に、会津の歴史認識に対する健次郎の寄与を論じた。とりわけ『京都守護職始末』や『会津戊辰戦史』との関

わりについて、未刊行の「遺稿」原稿を用いながら論じた。

第一に、兄の浩名義で刊行された『京都守護職始末』に関する史料として、「会津藩主要人物略伝（未定稿）」を取り上げた。執筆年の推測から、やはり健次郎が『京都守護職始末』執筆にかかわったことが推定されることを論じた。松平家の窮状を救うためにいったんは非公開を約したものの、維新史料編纂会が文部省に設置されると、一転、世に出したと考えられる。その際、藩閥とりわけ長州閥への批判を意図していたために兄の浩名義で刊行したと考えられること、その反動で健次郎の九州帝国大学総長転任に山県有朋が介入したと考えられると論じた。また、「会津藩主要人物略伝（未定稿）」の梶原平馬に関する記述に注目すると、健次郎が梶原平馬の死去を少くとも明治三三年頃には把握していたことが裏付けられた。関連して、梶原平馬と貞（テイ）の足跡に関する調査結果も付した。

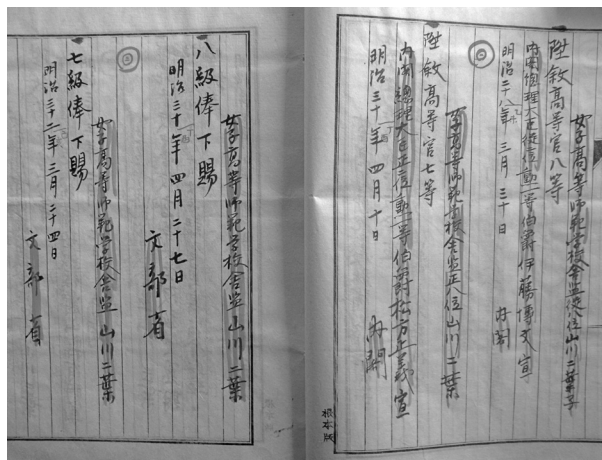
第二に、健次郎が監修した『会津戊辰戦史』に関して、「遺稿七」原稿に収録された原稿が、附録として収録するための準備原稿であったと論じた。さらに「幻の附録」となった『幕末会津志士傳』の目次（案）と健次郎の添削を論じた。健次郎は晩年まで『会津戊辰戦史』の監修に精魂を傾けた。結果的に、附録を完成させることなく世を去った。『会津戊辰戦史』は刊行されたが、健次郎が執筆していた原稿は収録されないままとなった。

まとめると、健次郎がその歴史編纂事業を通じて、いかに薩長中心の「明治維新観」と対峙しようと試みたかを明らかにした。

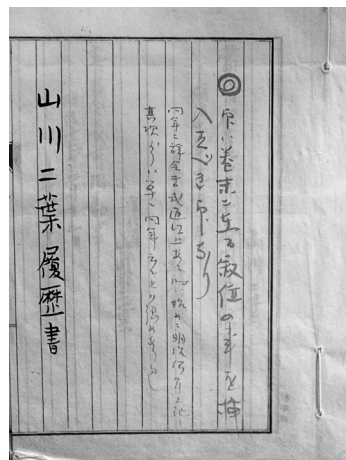
〔謝辞〕 調査にご協力頂いた、山川健次郎のご遺族、白虎隊記念館の早川広行氏、杉浦勢之先生、会津若松市立会津図書館、北海道立文書館に感謝する。

『幕末会津志士傳』の入力に際して、市川周佑氏（青山学院大学大学院生）、中澤俊輔先生（秋田大学准教授）の協力を得た。
本稿は、平成二九・三〇・令和元年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）JP17K03107の成果の一部である。

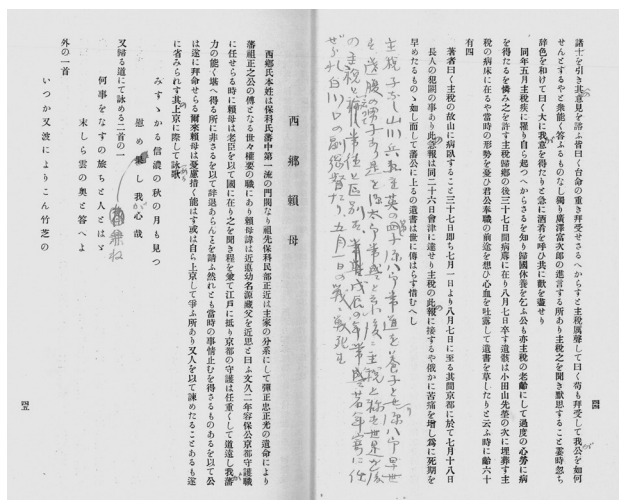
写真一・二 「山川二葉履歴書」（ご遺族所蔵）



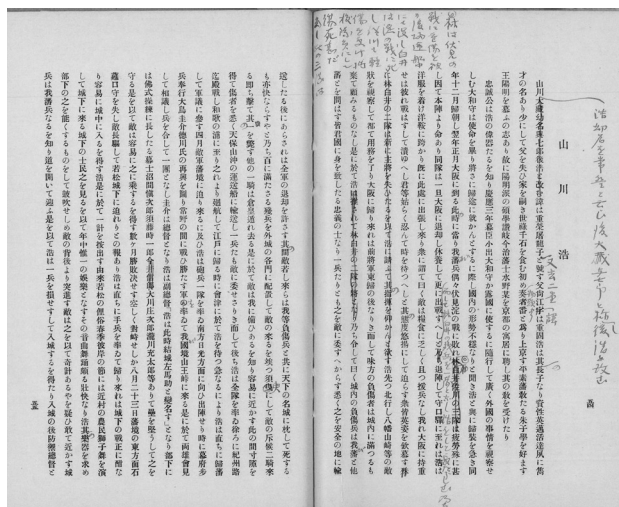
写真二



写真一



写真七 横山主税



写真八 山川浩